



注目を集める高層ビルで開業し、“整形内科医”としてリウマチ治療を実践

2015年3月取材

大阪府大阪市
えすみリウマチ整形外科クリニック 院長
重栖 孝先生

2014年4月に開業した、えすみリウマチ整形外科クリニックは、日本一の高さを誇る超高層複合ビル“あべのハルカス”のメディカルプラザ内にあります。関西圏を中心に約20年間、勤務医をしてきた院長の重栖孝先生は、これまで積み重ねてきた経験と知識を生かし、地元の人々の健康に貢献しています。

魅力的な場所での開業

“あべのハルカス”が誕生したのは、重栖先生が勤務医を続けるか、開業医になるかの選択に悩んでいた頃でした。「手術から離れるかどうかで迷っていました。しかし、私は整形外科のリウマチ専門医です。患者さんの体質などを総合的に見極め、個々に合った薬の組み合わせを考えるなど、内科的要素が不可欠です。開業することで患者さん一人一人とじっくりと向き合い、内科的な部分に力を入れることができます」。生まれ育った地元で開業するチャンスが巡ってきたことも大きな決め手となりました。“あべのハルカス”のメディカルプラザ内には12のクリニックが入居しており、各専門科の医師との連携体制が築かれています。総合病院のような環境で患者さんの治療ができる点も、重栖先生にとって魅力だったそうです。



牽引治療や点滴を行う治療室からは大阪の街を一望でき、リラックスしながら治療を受けることができます。

全身を診る“整形内科医”をめざす



待合室には、痛みを抱えて来院する患者さんの気持ちを少しでも明るくしたいという思いから選ばれた色合いのソファが並んでいます。

重栖先生が大学の医局人事で最初に赴任したのは松山赤十字病院リウマチセンター（現・リウマチ膠原病センター）でした。「その頃はリウマチ専門医になる気はありませんでしたが、同センターで行われているリウマチ治療を目の当たりにし、『こんなにも症状が改善されるのか』と衝撃を受けました」。当時はまだ保険適用されていなかった抗リウマチ薬を用いた治療を全国に先駆けて実施していたのです。多い時で1日100名の患者さんを診療するという多忙な日々でしたが、ここで内科的な目が鍛えられた重栖先生は、開業後、自らを“整形内科医”と表現します。患者さんと向き合い、直接患部に触れて、関節の腫れや状態を丁寧に調べる姿勢が“整形内科医”と称する所以です。

リウマチはオーダーメイド治療が大切

同クリニックでは、生物学的製剤を含むさまざまな抗リウマチ薬による治療を行っています。「治療薬をうまく使えば寛解をめざすことも可能ですが、全ての患者さんに有効とは限らないのがリウマチ治療の難しいところです。合併症のある患者さんで、効果は高いがリスクを伴う可能性のあるケースでは別の薬を選択します。また、患者さんが薬を飲みこなせるかを見極めることも重要です」と重栖先生は言います。メンタル面まで考慮しながら、オーダーメイドの治療を提供する診療は患者さんからの信頼も厚いものとなっています。「今後は、リウマチの早期発見と治療の啓発活動にも力を入れて、駅直結という好立地を生かして、ロコモティブシンドロームの予防にも取り組みたいですね。寝たきりを防いで健康寿命を延ばすため、整形外科医がやるべきことは非常に多いと考えています」と話すように、重栖先生の取り組みは広がっていきます。



ウォーターベッドは腰痛や肩凝りの治療に用いられますが、独特の浮遊感で癒やしの効果も期待できるそうです。